

「ゲツセマネで祈る」

2022年06月13日

そして、ペトロ、ヤコブ、ヨハネを伴われたが、イエスはひどく苦しみ悩み始め、彼らに言われた。「私は死ぬほど苦しい。ここを離れず、目を覚ましていなさい。」少し先に進んで地にひれ伏し、できることなら、この時を過ぎ去らせてくださるようにと祈り、こう言われた。「アッパ、父よ、あなたは何でもおできになります。この杯を私から取りのけてください。しかし、私の望みではなく、御心のままに。」（マルコ福音書14章33節～36節）

主イエスと弟子たちの一行は、ゲツセマネに来た。ゲツセマネは「油しぼり」という意味で、オリーブから油をしぼる所であったのであろう。そして、ここは、ユダが主イエスを売り渡す場所に行っていることから、一行のいつもの秘密の集会場であったと思われる。主イエスは弟子たちに、「私が祈っている間、ここに座っていなさい」と言われた。そして、ペトロ、ヤコブ、ヨハネの三人を伴い、少し離れた所に行かれると、ひどく苦しみ悩み始め、「私は死ぬほど苦しい。ここを離れず、目を覚ましていなさい」と言われた。主イエスは苦しむ姿を弟子たちに見せたことはないので、弱々しく苦悶する様を見て、三人はあっけにとられたであろう。主イエスは少し先に進んで、地にひれ伏し、可能ならば、この時を過ぎ去らせてくださいと、「アッパ、父よ、あなたは何でもおできになります。この杯を私から取りのけてください。しかし、私の望みではなく、御心のままに」と祈られた。幼児が父を親しく呼ぶ時のアラム語で、神に「アッパ」と呼びかけ、「あなたは何でもおできになります」と、全能の父を信頼して祈られている。ここでは、二つの祈りが捧げられている。一つは「この杯を取りのけてください」という祈りである。杯は十字架を意味し、十字架の死を取りのけてくださいという懇願である。十字架はローマへの反逆者に対する最も残酷な刑罰で、主イエスは幾度も十字架刑を見たことがあったであろう。人間イエスは恐怖に怯え、十字架から逃れたいと、苦しみ悶えながら祈りを捧げられた。もう一つは「しかし、私の望みではなく、御心のままに」である。これは、十字架の苦しみから逃れたいが、私が望むようにはなく、神の御心が実現しますようという祈りである。第一の祈りと第二の祈りの間には遠い距離があったに違いない。十字架から逃れたいと、長時間、全力で祈られた。しかし、祈りは、私ではなく、神の思いが実現されますようにと昇華されていった。祈りは自分の願望を打ち明けることであるが、その先で、神の御心の優先へと導かれていく。この祈りに到達することは並大抵ではないが、主イエスは砕かれた信仰によって、この祈りへと高められ、清められている。

主イエスは祈って、弟子たちの所に戻ってみると、彼らは眠っていたので、ペトロに、「シモン、眠っているのか。一時も目を覚ましていられなかったのか。誘惑に陥らぬよう、目を覚まして祈っていなさい。心ははやっても、肉体は弱い」と言われた。弟子たちは、過越の食事で満腹し、眠気に襲われたのである。主イエスが人の罪を担って苦しむ姿を、目を覚まして見ていなさいと言われたが、肉体が弱く、主イエスの苦悩を見つめることができなかった。彼らの醜態は、主イエスの十字架を凝視できず、自分の弱さに埋没してしまう人間の弱さを現わしている。主イエスは二度目、三度目の祈りの後、戻って来ても弟子たちはなお眠っていた。主イエスは、「まだ眠っているのか。時が来た。人の子は罪人たちの手に渡される。立って、行こう。見よ、私を裏切る者が近づいて来た」と、決然と言われた。十字架の死を神の御心として受容し、心を決められたのである。